

調査レポート

県指定文化財「釈迦涅槃図」などの調査を行いました

8月上旬、小友町にある桂林山常楽寺のご協力のもと、同寺に伝わる資料の調査を行いました。

桂林山常楽寺は、臨済宗妙心寺派の寺院で、もと附馬牛町にあった東禅寺の末寺\*です。応永24年(1417)に小友町太田の南館に創建されましたが、明暦年間(1655~58)に火災にあって堂宇を焼失したため、現在地に移りました。幸いにも焼失を免れた「釈迦涅槃図」「十三仏画」は岩手県の有形文化財に、本尊である阿弥陀如来坐像、脇侍\*の観音菩薩立像と勢至菩薩立像は市の有形文化財にそれぞれ指定されています。



▲桂林山常楽寺

中世の優れた作品

今回の調査では、「釈迦涅槃図」「十三仏画」のほか古文書や絵図、古写真の調査を行いました。調査を担当したのは、原始・古代・中世部会のうち、中世・文献グループの委員4名です。

「釈迦涅槃図」は、釈迦\*の入滅(死)の場面を描いた図です。常楽寺のものは、応永27年(1420)の銘があり、永禄8年(1565)に明林貞円信女という戒名を持つ女性から、常楽寺に寄進されたことが過去帳などからわかっています。

「十三仏画」は、人の死後初七日から三十三回忌までの13回の法事を司る13の諸仏を描いた図です。十三仏の信仰は室町時代ごろに民間に広まったとされています。こちらの制作年代や来歴は不明ですが、図が描かれた絹の織り目の粗さなどから、室町時代前期のものと推定されました。

いずれも完成度の高い優品であり、当時の常楽寺、ひいては中世の遠野を考える上で、非常に貴重な資料です。

これらの調査結果は、令和5年度刊行予定の「資料編」にまとめられる予定です。

用語解説

\*末寺…まつじ。

本山、本寺に属する寺。江戸時代に寺院統制のために定められた本末制度に由来。

\*脇侍…きょうじ。わきじとも。

信仰の中心となるほとけの左右に控える菩薩や明王などのこと。

\*釈迦…しゃか。釈迦牟尼(釈迦族の聖者の意)の略。仏教の開祖ゴータマ・シッダールタのことで、その呼称は出身部族名に由来する。

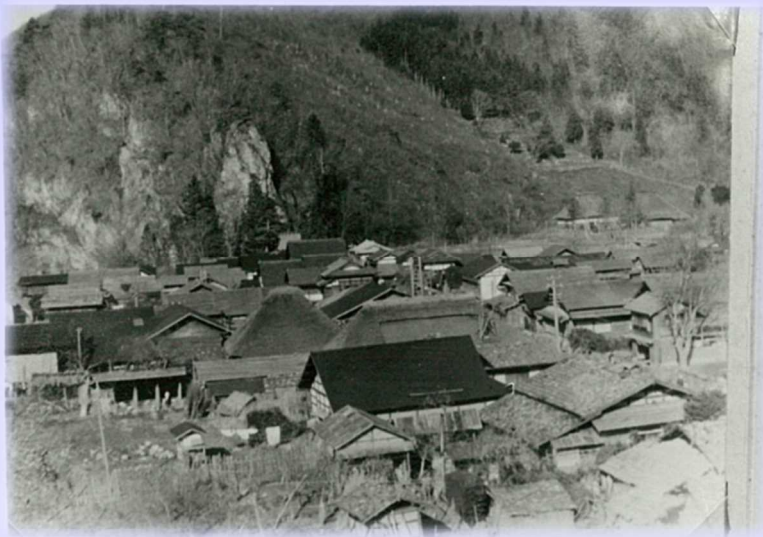


▲十三仏画の調査の様子。年代や大きさなどを調べ調書に記録します。



▲撮影の様子。今回は本堂の一角をお借りして調査を行いました。

# 写真でみる とおの今・昔 ～小友の宿場町～



左の写真は、小友町の町場と不動岩を写した写真です。右手奥に見える常楽寺の本堂の屋根が茅葺きであることから、昭和 33 年以前の写真であると考えられます。

小友町は、内陸と沿岸を結ぶ宿場町として、また金山の町として栄えました。中心部の町場には遠野遺産第 87 号「小友村道路元標と追分の碑」があり、交通の要衝であったことを現在に伝えています。

この町場がいつごろできたのかは不明ですが、江戸時代に書かれた『遠野古事記』では、以下のように記しています。

「…小友の町は古くからある町ではない。金山が繁盛していた時、たくさんの方が集まってきたので、商人たちは仮の小屋を建てて商売をした。金の採掘が止まった後は、小屋をやめて町屋を建て、人首への馬の中継地になったが、人馬の往来が少なかったため、商売が成り立たなかった…」(抜粋部分を意訳)



上の写真は昭和 11 年 (1936) 8 月 29 日に撮影された写真です。実はこの年の 3 月 4 日未明、町の中心部から出火し、23 戸が焼失する大火災が起きました。その復興の様子を写した写真でしょうか。

左は令和 2 年 (2020) 8 月 24 日に撮影した写真です。かつて旅館や商店が軒をつらね、「小友銀座」と呼ばれたメインストリートは今もそのたたずまいを残し、小友町のシンボル・不動岩が変わらぬ姿を見せています。



市史編さん室では、古い時代の資料や館跡を調査しています。  
古文書や古写真をお持ちの方は、ぜひ市史編さん室までご連絡ください。

